

市長賞

滴^{しずく}

仁 科 すみ子

人生の締めくくりに入ることを考える年齢に近づいてきた私は、これから先、どれほどゆかしき人々との別れを重ねていくことになるのだろうか。ある日突然に迎えなければならない別れのときを、今後数多く身近に経験するときに、すぐそこに迫ってきている。

私は今までに忘れられない別れを二つ見てきた。

六人兄弟の一番末の夫は、体が弱かった母に代わって十五才年上の姉に育てられた。姉は雪国で戦時中の貧しく厳しい時代に、自分の楽しみは諦め、弟たちを育てあげてくれた。兄弟は姉に深く感謝したが、すでに三人が鬼籍に入ってしまった。早くに両親を亡くした夫は、姉に親孝行に近いことをし、老後は自分が守るつもりでいた。夫は退職して農業をしていたが、脳梗塞で倒れ体の麻痺は逃れたが、高次機能障害になり周りに言葉を伝えることができなくなった。自分の身の上に降りかかった運命にこれからも無言で耐えしのぶ道しかない。

姉は気丈に一人で何でもこなし生活していたが、足が不自由となり下の姉の世話で介護施設に入った。施設からの電話で認知症が始まったとは聞いてはいたが、夫はそれすら理解できない。その頃コロナ規制で介護施

設での面会ができなくなった。その間、夫も姉に元の自分を見せようとりハビリを頑張ったが、思うように改善しなかった。

三年ほどでコロナ規制が解除され、介護施設でガラス越しの十五分の面会が可能になった。姉は弟がわからず、姉の眼は宙を見たままである。その瞬間、夫は片腕で目を覆い慟哭、悲泣の叫び。夫は姉の名前すら思い出せず言葉にもできず、かける言葉を発することもできない。恩を返せない不甲斐ない自分を責め、もっと早く行動を起こしていたらという生涯の後悔、ただ泣くしかない。泣いている夫の横で姉の眼が一瞬動き、夫を見たがまた宙をみている。手には使い慣れたタオルを握りしめ、それが小刻みに震えている。人生の師であり、母のように慈しみ育ててくれた最愛の姉との再会がこんな哀しい別れとなってしまった。

夫が元気な頃好きだった万葉集の歌がある。

山吹の立ちよそひたる山清水汲みに行かめど道の知らなく

高市皇子が亡くなった姉たけのみこの十市皇女を詠んだ歌で、死者が住む「黄泉」の国へ行く道が分からず、会うことができない亡き姉への哀しみを込めて詠まれたと言われている。今、夫の頭の中は山の泉のかたわらの山吹が咲いているところを、彷徨っている気がする。

あの日。二十年前。忘れられない母と母の友との別れがあった。

母はその季節になると山桜が咲き乱れる小さな山村で、多くの兄弟と共に仲良く楽しく育った。学校では同級生の多くが親戚で、男女みな自分の分身のように楽しみも悩みも分かち合って育った。その中の一人に兄弟でもなく、恋愛でもなく、心から信頼し安心できる異性の友がいた、と聞いたことがある。

母が亡くなる四日ほど前、土^{つち}氣^け色^{いろ}して座るのも大変な母が私に形見分けの話をしていた。するとその男性が突然病室に入ってきて母の名前を呼んだ。母はその人を見るなり驚き、自分の顔を見られまいと力の入らない腕で必死に身体を後ろ向きにして、背筋を伸ばし座り窓の外を凝視していた。その男性の前で声を発したら、死を前にして取り乱さないように耐えていた自分が崩れてしまうと思ったのか、しばらく沈黙が続いた。

山に囲まれた故郷で春を告げる一つとして咲く山桜。母はその山桜を見ながら仲の良い兄弟や兄弟同様の幼友達と一番楽しい時を過ごしたであろう。何より小さいとき桜の下で飛び回っていたところに身を委ねていたに違いない。訪問者は初恋の人だっただろうか。辛く厳しいことが多かった母の人生の中での支えの光の一つだったかも知れない。背を向けることで終焉の幕引きをしたように思えた。死を前に痩せ衰えた姿を見せまい、かつての自分を残してはしい、という思いで必死だったかもしれない。

「わざわざ来てくれてありがとう。こんなになってしまっ……」

最期にポツリと言った。背中を向けた気の強い母の肩がかすかに震えていた。母の辿ってきた人生が見えた気がした。

病室の窓には満開の山桜があった。涙を拭う母の後ろ姿は、悲しく、美しかった。

今年もまた山桜が咲く時期がやってきた。山桜を見ているあの時の母の姿が、また目に浮かぶ。

春めきて初山桜咲きけむる傍らに笑む若き日の妣^{ななは}